

氏名（本籍）	工藤 理恵
学位の種類	博士（看護科学）
学位記番号	博甲第 9903 号
学位授与年月	令和 3 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	糖尿病外来における看護師のための口腔管理支援実践ガイドの開発
主査	筑波大学教授 博士（心身障害学） 森 千鶴
副査	筑波大学准教授 博士（保健学） 大宮 朋子
副査	筑波大学助教 博士（看護科学） 小澤 典子
副査	筑波大学准教授 博士（医学） 鈴木 浩明

論文の内容の要旨

工藤理恵氏の博士学位論文は、糖尿病外来における看護師のための口腔管理支援のための実践ガイドを開発し、その有用性を検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

著者は、糖尿病患者には唾液の分泌が悪く歯周病が多いこと、また歯周病のために血糖値のコントロールが悪くなっている患者が多いことに着目した。また、FDI(The world Dental Federation)とInternational Diabetes Federation(IDF)は、糖尿病管理には口腔疾患の予防と口腔保健の促進が重要であることから、協力してガイドラインを作成していること、我が国においても日本歯周病学会が糖尿病患者に対する歯周病治療ガイドラインを作成したことを著者は紹介している。しかしながら、我が国において医科と歯科の連携が不十分であること、糖尿病患者の口腔保健行動について調査した研究では、歯磨き行動にとどまっていることを著者は先行研究より明らかにした。著者は本研究で、糖尿病患者への口腔自己管理教育の普及に向け、糖尿病外来において看護師が口腔管理を主体的に実施できるよう口腔管理支援実践ガイドを開発し、その有用性を明らかにすることを目的としている。

【ガイドの作成】

著者が開発したガイドは、糖尿病療養指導士の資格を持っている糖尿病を専門とする外来看護師を対象としている。また、歯周病管理に関する重要事項を簡易に短時間で指導できるような1つの内容を1ページに収めるよう著者が工夫している。

ガイドの原案は、1950年代から健康教育に用いられた行動変容理論である、KABモデルを用いて著者は考えている。この理論は、必要な知識の習得と理解、並びに望ましい知識が必要とされるとき、行動変容をもたらすという理論であり、知識(Knowledge)の習得が、態度(Attitude)の変容をもたらす、行動(Behavior)が変容すると考えるものである。

著者が先行研究より以下の知識を導き、3段階で構成した。それは①口腔内のアセスメント援助方針、②糖尿病外来で口腔管理支援を継続する患者への対応、援助指針、③歯科受診の促しという段階である。特に①口腔内のアセスメントではOHAT-J(Oral Health Assessment Tool)を用いて評価しやすく工夫している。②糖尿病外来での口腔管理支援において、著者は食事療法の他に唾液分泌促進の支援やリハビリテーションを用いている。③については、アセスメント結果により歯科受診を必要性の判断した患者に対する促し方について述べている。

著者はガイドで学習し糖尿病患者に実践した看護師の行動について質的・量的に調査し、有用性を検証している。

【有用性の検証（1）：理解度、使用評価について】

有用性の検証として著者は、154 施設のうち、対象者基準を満たし同意の得られた 54 名にガイドを配布しガイドの理解度と使用評価に関する調査を行っている。このうち、23 名から回答を得、有効な 21 名の結果を分析している。

回答者は全員女性で、平均年齢は 49.2 ± 7.4 歳であり、糖尿病療養指導士の資格を得てから 9.6 ± 5.2 年実践していた。ガイドについての理解ができたとは回答したのは 17 名であった。口腔管理が重要であると回答したのは 19 名、ツールとして活用したのは 12 名、全ての項目を活用したのは半数であったことを明らかにしている。また患者の時期の適合性については 71.5% の人が適切であったと回答していたことを著者は明らかにしている。さらに外来でガイドを用いて支援した時間は 17.6 ± 9.8 分であり、負担であったと回答したのは 7 名のみであったと述べている。

また自由記載欄には、ガイドを使用して良かったのは、口腔管理を実践するきっかけになった、あるいは指導しやすかったと回答を得たことから、著者は、ガイドにより知識を得ることで、態度に変容が認められたと考察している。

【有用性の検証（2）：質的評価について】

著者は糖尿病療養指導士の資格をもつ 4 名の対象にインタビュー調査を実施し、質的評価を得ている。4 名は 4 年から 15 年の実践経験を有するいずれも 40 歳台女性であった。これら 4 名がガイドを用いた糖尿病患者は、延べ 49 名であったと述べている。またガイドを用いた質的評価としては、【これまでの口腔管理の実践への反省がある】、【口腔管理を実践していきたい】、【ガイドを施設内で普及させたい】などの意見を得ることができた。これらのことから著者は、対象者に行動の変容が認められたことを明らかにしている。

【考察】

著者はこれまでに作成された歯周病管理アセスメントシートや援助プログラムでは、アセスメントが難しく、時間もかかることから教育が困難であったことを指摘した。そこで著者は、アセスメントをしやすく工夫して作成した糖尿病外来における看護師のための口腔支援実践ガイドを作成し、そのガイドの有用性を検証した。糖尿病療養指導士が、ガイドを用いて糖尿病患者に指導が可能になったのは、必要な知識を適切な量で提供していたことから看護師の態度に変容が生じ、糖尿病患者に口腔管理指導を実践するという行動の変容につながったことを明らかにしている。また、このガイドの有用な点を、糖尿病患者の指導にかかる時間も短く、理解が深まったことから明らかにしている。また作成したガイドは、糖尿病療養指導士の資格をもつ外来看護師が、外来の度に糖尿病患者に対し実施可能であること、糖尿病患者に口腔自己管理に対する気づきを促すことができる点が特に有用であることが示唆されたことを示した。さらにガイドを活用して研修を実施することにより、看護師が口腔管理の重要性を実感できる可能性を示唆している。

審査の結果の要旨

（批評）

著者は糖尿病患者への口腔自己管理普及に向け、糖尿病外来において看護師が口腔管理を主体的に実施できるよう、文献等からエビデンスのある口腔管理支援実践ガイドを開発し、その有用性を明らかにすることを目的に、量と質の両側面からガイドの有用性を明らかにした。このようにエビデンスのあるガイドを開発したことは重要であると判断した。

令和 3 年 1 月 26 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（看護科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。